

現地ルポルタージュ

食農教育につながった “自給の心”

「ナベちゃん自給の家」元JA生活指導員 渡辺 広子

一、なぜ「自給運動」だったのか

食べ物をつくる農家の集まりである農協が、その農家に向かって「食べ物をつくりましょう」と呼びかける運動「農産物自給運動」。これは常識でない運動です。常識である暮らしを取り戻し、本物の農民の幸せ、農家の豊かさを取り戻そう。そのための手段としての「自給自足運動」だったのです。大事な老人の、子供の、夫婦の、協同の、農の心を犠牲にして、稼いできたお金で買って食べるものは何か。その正体を知ることとは、「何故自分の食べ物をつくらなくてはならないのか?」を肌で感じることもあったのです。三〇年間のあの手この手での運動でした。

豆植運動＝輸入大豆(農産物)の怖さ

鶏一〇羽運動＝飼料添加物の怖さ

旬のものを食べる運動＝旬の食べ物の意義、そして、子供達の食の常識を取り戻す運動

一粒一粒蒔いた種は雑草のように目立なくても、確実に強い小さな花をつけてきたのです。婦人部の部落共同畑、有機農業、農の生け花、百裁館等々、若い母親と共同畑に出る子供達、若夫婦からいろいろ頼ま

れ忙しくなった老人達等、休んでいた集落の婦人部が復活し、地域がいつの間にか活

き活きと首をたててまわり始めました。

「俺(オラ)、百姓のジジ・ババでエガッタ(良かった)」「僕も、私も農家だよ!」

と飛び上がって手を上げる子供達、「本物の食べ物をつくる農家の嫁になってよかった」

という会社勤めの嫁達。農家・農民としての自信と誇りを持ち、農民としての自立と

いう小さいけれどたくさんの実が実ったのです。その種はまたこぼれ、飛び、どん

ん芽が出て成長しているのです。

二、「ナベちゃん自給の家」の小さな実践

自給自立運動の発展という夢の実現に向けて夢中で飛びまわっているとき、「定年」という言葉で我に返ったのです。自分の定

年も考えずにいた私は、猛スピードで走る車が急ブレーキをかけた如くの状態でした。

平成七年一月末日、満五一歳で農協の制服を返上しました。身体は家の中にあっても

心は夢に向かって動くのです。同年九月に五七歳で同じ農協を退職した夫(営農指導

員)や、お世話になった地域の組合員の人たちと共に農への熱い思いを語り合い、行動し、次代を担う子供達に健やかな農と食

を伝えていきたいという思いから、本物をつくり、食べ、飲んで集まる場「ナベちゃん自給の家」の小さな小さな看板を掲げたのです。同時にあちこちに農地を借り、

寝たきりの母と孫の世話をしながらの農業一年生が始まりました。その間、平成九年

から平成一二年三月まで臨時で、自給運動のまとめでもあり、食と農を守り継ぐ殿堂

として建てられた「百彩館」の食事処に調理師として入り、地域内外に「食は農・農

は生命」を発信したのです。

一方、夫は「そば」に熱中し、国産のそば粉を手に入れ、そば打ちを始めました。

結局、自分で栽培したそばで作りたいということ、借りた畑の一部でそば栽培を始めたのです。チャンスのみては手打ちそばの

名店を訪れ、体験場では体験させてもらい、太く固いそばからいつしか香り高い、細いツ

ルツルのそばができるようになりました。

三、「ナベちゃん自給の家」の食農教育

平成一二年春、本荘市内にある県立の知的障害児の由利養護学校高等部から、一年

間を通してのそばの先生に「ナベちゃん自給の家」が依頼されたのです。平成一

一年から一二年の二年に渡る、文部省指定・県教育委員会委嘱「交流教育地域推進

事業」の、最終年度の高等部の活動でした。一年間の様子を最後の公開研究発表会での

発表内容と、生徒たちからのお礼のお手紙(写真)で紹介したいと思います。

三学期はそば研究発表会で締めくくりました。そばのルーツから栽培、花と実の研究、そば粉を使った料理研究等……。卒業生の一人は郡内山間部に開店したそば屋に就職したのです。そして、翌平成二三年は、木工班がこま板やザルそば用のザル、のし板、まな板等を作り、そば切り包丁やこね鉢等を揃え、本格的に自分達で取組み、秋には地元市内の老人クラブのメンバーを招待した収穫祭を行う等、小さなそばの実がこんなに大きく成長していることに深い感動でいっぱいです。

同時に、「ナベちゃん」の自給の家、も平成一三年にはそば畑は一反五畝に、他にエゴマ・大豆へと拡大したのです。それに伴い、軽ワゴン車を購入し、出張そば教室の道具運びから農作業車と「ナベちゃん号」の活躍もなかなかです。

同年一二月には、「町内の小学校(町部)の四年生二クラスがそばを栽培したが、作って食べる程の量もなく、でも是非、子供達に町内産のそば粉でそば打ち体験をやらせたい」という相談を担任の先生から持ちかけられたのでした。冬休み前の二日間、一回四〇人の子供達全員が順番を持つように、五人一グループで八班に分けました。子供達の活き活きした顔々、そばの香りや味を感じ取る純粋さ、そして手をかけ心をかけて自ら作ったものの本物のおいしさを体全体で受け止めているのです。生命の源である食べ物とは、地元の材料が一番であること、農業とは生命の源をつくっていること、食べ物が口に入る

までに関わってきた多くの人や自然に感謝しなければならぬこと、おいしさの基は、自分もそれをつくる一員であり、みんなでつくりみんなと一緒に食べること。この大事なことを汗を流しながらみんなで知ったのです。(子供達の感想文・写真)



生徒達からのお礼の手紙と感想文

四. デイサービスで食農教育

「ナベちゃん号」は、子供達だけではなく集落単位のミニミニデイサービスにも出かけてきました。降り積もる雪の中、そば道具七セットを積み込み、集落へ向かいました。ストーブの側に集まっていた高齢者の皆さん。皆つい最近まで組合員として、また婦

人部員として運動した仲間であり、育ててもらった先輩達の懐かしい面々です。会場の真ん中に青いシートを敷き、説明後一斉にスタートです。「足が曲がらないから」「手が痛いから」「座れないから」なんて言っていたことは忘れ、ストーブを消しても出る汗と、笑い声で熱気があふれる。エゴマぼた餅と各班自慢のそばで、「いつも上げ膳、据え膳だけで自分達でつくったのもウメエナー、体動かしただからウメエナー」「今年そばとエゴマ植えてみるか。ナベさん種あるか?分けてくれナー」「ナベさん狂牛病って一体何よ、いつしか昔の座談会になっていました。

新年を迎え、本荘市内の老人クラブに出かけました。私の「食べ物のはなし」、そして、夫のそば打ち。農村と異なり、何かよそよそしかった雰囲気もそばの玉が耳たぶぐらいの固さになる頃は皆、小学生と同じ。こね鉢の中に我先と手が入る。世界地図のようなそばを切り、食べる顔は最高にいい顔である。この老人クラブでは、今年に隣の町の空いた農地を借りて、そばをつくるという。私達と一緒にやりたいという。農業をやったことのない老人クラブの方達がそばの魅力、いや農業(土)の魅力にとりつかれ、今年はランドゴルフのスティックを鍬に持ち変えるというのです。「ナベちゃんの自給の家」で、県外や町内外の人達がそばを食べながら、古い農具や野良着、パッチワークの中で農や夢を熱く語っていただくのです。